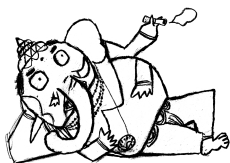


夢をかなえるゾウ 1

水野敬也



文響社



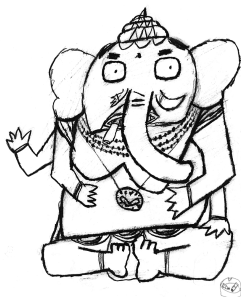
夢をかなえるゾウ 1

插画 矢野信一郎

装丁 池田進吾 (next door design)

これは、ちよつぴり不思議なお話である。





「おい、起きろや」

聞きなれない声に目を覚ました僕は、眠気で重いまぶたをゆっくりと持ち上げた瞬間、眼球が飛び出るかと思うくらいの衝撃を受けた。

なんだ、コイツは!?

枕元にヘンなのがいる。ゾウのように長い鼻。鼻の付け根からのぞく二本の白い牙（片方の牙はなぜか真ん中あたりで折れている）。そしてぼつりとした大きな腹を四本ある腕の一つでさすっていた。

こんなやつが。

長い鼻をゆらゆらゆらゆらと揺らしながら、目の前に座っているのである。昨日、たまたま家に泊まっていった同級生みたいな感じで。

直感的に、「ああ、これは夢だな」と思った。まだ夢の中にいるのだ、きっと。僕はよく夢を見る。いつも眠りが

浅いせいかもしれない。眠りが浅いと疲れが取れない気がするし、その上こんな化け物と遭遇そうぐうするなんてつくづく嫌な体質だと思う。でも、僕は開き直すことにした。夢だと分かれば恐れることはない。

「お前、だれ？」

大胆にたずねてみた。すると化け物はふん、と鼻を一つ鳴らして言った。

「だれやあれへんがな。ガネーシャやがな」

そして「タバコ、吸うてもええ？」と言いながら、僕の返事も待たずに、丸テーブルの上に置いてあるタバコの箱から一本取り出すと火をつけた。やつが手にしている黄色の一〇〇円ライターに見覚えがあった。というか、それ僕のだ。

ガネーシャと名乗った化け物は、六畳一間の低い天井に向かってぷはーと煙を吐はきながら言った。

「で、覚悟でけてる？」

「は？」

「いや、『は？』やあれへんがな」



頭がずきずきする。二日酔いだ。まだ残っている酒と寝起きとでくらくらとめまいがする。(なんでこいつは関西弁なんだ?) そんなことを考えながら化け物をつろな目でながめていた。その時僕は不思議なことに、こいつ、どこかで見たような気がするなあと思っただけ、それがいつ、どこでなのか思い出すことはできなかった。

いずれにせよ。

もう少ししたらこいつは消えていなくなるだろう。なんてったって、これは夢なんだから。

「夢ちゃうで」

突然、強い口調でガネーシャが言ったのでびっくりした。こいつ、人の心が読めるのか?

「もつと見ようや、現実を」

何の話だ?

「自分、そんなことやから、『夢』を現実にでけへんのやで」

なんなんだこいつは。あーなんか腹立ってきた。もういいや、寝よ寝よ。面白そうだったからちよつと付き合っつてやろうかと思っただけ、急激にムカついた僕は、

朝の眠りを再び楽しむべく化け物にプイと背中を向けた。

あ。

その時だった。

突然、僕はその化け物のことを思い出してしまったのだ。

「いや、そんなはずは……」

僕の額からは嫌な汗がじとじと流れた。さっきまで「これは夢だ」と思っていた。でも今となっては、「夢であってほしい」という願望に変わっていた。

僕は、どうやらこの化け物のことを知っている！

ゆっくりと顔の向きを変えながら、恐る恐る部屋の中を見回した。いつもは電話台の横に置いてある手のひらサイズの置き物。三か月まえにインドへ旅行に行ってきた時になんとなく買ったゾウの神様（お土産売り場にやたらめったら売っていた）が床に転がっていた。

まさか、そんなはずが……しかし、目の前にうごめいている化け物は、どこからどう見ても、その神様とまったく同じ姿をしていた。急に怖くなって僕は頭から布団をかぶった。

「やっと思い出したようやな」

勝ち誇ったような声があった。ポツとライターに火がつく音がする。ガネーシヤは二本目のタバコを吸いだしたようだ。

「で、もう一回聞くねんけど」

一息ついてからガネーシヤは言った。

「覚悟、でけてるわな？」

自分の目で確認することはできないけど、きっとその時の僕はいわゆる顔面蒼白になっていたに違いない。

\*

赤坂のハイタワーマンション（名前は忘れてしまった。でも聞いたことがあるよ）うな名前のマンションだった）でそのパーティーは開かれていた。五〇人くらい住

めるんじゃないかと思うような大きな部屋。バーカウンターとかビリヤードとか、板チョコみたいで平べったいプラズマテレビとか、お店にしか置いてないようなものばかりが並んでいる。窓の外にはオレンジ色に輝く東京タワー。雑誌やテレビでよく取材されているカワシマという名前の実業家（なんとこの人はジェット機なんて持っているらしい）の誕生日パーティーだった。会社の先輩がカワシマという人のトモダチらしくて誘われたと言っていたが、実際のところはトモダチでも何でもなくて、ただ一回名刺交換したことがあるだけで、この誕生日パーティーにも、無理やりもぐりこんだ形だった。

何冊も本を出しているような成功した実業家、テレビタレントやプロ野球選手。雑誌のグラビアで見たことがあるモデルやアイドルの卵のようなきれいな女性たち。今まで足を踏み入れたことのない、華やかな世界だった。

僕たちはその華やかな世界の片隅で、誰にも声をかけず、そして当然、誰からも声をかけられず、何ていうか、僕たちの存在自体がその場で否定されているような感覚をずっと味わいながら、細長くて持ちづらいシャンパングラスに入った酒をちびちび飲んでいた。

帰り際、先輩が言った。

「でも芸能人とか見れてよかったよな！」

よかったどころか、死ぬほど嫌な気分では僕は自宅に着いた。

\*

「自分、昨日めっちゃ泣いとったで」

ガネーシャはなぜか宙にふわふわと浮かんでいる。

「号泣しながら言うてたやん、『変りたい』て」

昨晩の記憶を思い出すにつれ、顔が火照ほてっていくのが分かった。確かにパーティーが終わった後、自宅に帰ってきた僕は自分の住む部屋とあのパーティー会場のあまりの違いにがく然として、むしろくしゃして、冷蔵庫から発泡酒を取り出して同時に二本の封をあけた。四本目にさしかかったあたりから、ガネーシャの置き物が妙に気になりだした。僕がこんなに悩んでるのに、何を優雅に座ってやがるんだコイツは！僕は右手でガネーシャの頭を乱暴につかむと、机の上に持ってきた。

酔った勢いで、わけの分からないことを口走った気がする。

俺も昔は結構すごかったんだよ。小学生の時とか、リレーの選手になったりしたし、成績だっていつもクラスで上の方で。それなりに名の通った大学に入ったし、今の会社に内定した時も親は喜んでくれた。大学行かないやつだっているし、今じゃ働かないニートなんてやつらもいる。それに比べたら頑張ってるほうだ。

でも、なんか今の俺、すげー普通。すげー普通の会社員。「普通が一番難しい」なんていうけど、嘘だうそね。だって多いから普通なんだよ。多いってことはそれだけ簡単だってことだろ？ 簡単だから多いんだろ？ ぶっちゃけた話、やつぱりあいう華やかな世界見せられたら、羨うらやましいって思うし。ああいう場所だと今の自分めっちゃくちやみじめだし。なんだかすごくナメられてる感じしたし。こっち側かあっち側でいったら、やつぱあっち側行きたいし！ めっちゃ行きたいし！ おい、ガネーシャ！ お前神様なんだろ！ なんとかしろよ。今の俺のこんな感じ、なんとかできるだろお前だったら！ おい、コラ！

ひとしきりガネーシャに毒づいたあと、  
「なんでもしますから」

と泣きながらガネーシャの置き物に何度か頼ほおずりをした。

……ような気が、する。

「で、どないすんねん」

「どないする、とおっしゃいますと？」

「いや、せやから……話聞いとった？ 自分、変わりたいの変わりたないの？ ど  
っち？」

「そ、そりゃ変わるものなら変わってみたいですけど」

そう口にして僕はうつむいた。

思えばこの時から僕は少しおかしかった。目の前でふんふん鼻を鳴らしている奇妙な化け物があるのに、僕は、自分について、固い言葉でいうなら自分の人生について、妙に真剣に考えてしまった。これもガネーシヤの持つ不思議な力なのかもしれない。

このままで終わりたいかと思っている。お金持ちになりたい。ちやほやされたい。成功したい。有名になりたい。なにか、こう、自分にしかできないような大きい仕事をしたい。今のままじゃダメだ。それは分かっている。でも、「変わる」って。口にするのはとても簡単だけど、実行するのがこんなにも難しい言葉はないんじゃない。

なかるうか。だいたいインド行つたのだから、会社にこき使われるのと、上司のダメ出しが嫌になつて「俺は人生変える！」なんて無理やり有休を取つて、鼻息荒くして行つたのだ。あれはあれで僕にとつて一世一代の決断だった。

——そして今、インドに行く前とまったく変わらない生活を送っている僕がいる。そんな僕を僕はまた少し嫌いになりかけていた。

しかも、

それがはじめてじゃなかった。

今まで、僕は何度も何度も、変わろうと決心してきた。目標を決めて毎日必ず実行しようと思つたり、仕事が終わつて家に帰つてきてからも勉強しようとするのだけれど、でもだめだった。「やつてやる！」そう思つてテンションが上がつてゐる時はいいけれど、結局何も続かなくて、三日坊主で終わつてしまつて、もしかしたら「やつてやる！」つて思つた時より自分に対して自信を失つていて……そんなパターンばかりだった。

変わりたいと思う。

でも、いつしか「変わりたい」という思いは、「どうせ変われない」という思いとワンセットでやってくるようになっていた。



「その心配は無用や」

突然、ガネーシヤが口にした言葉に僕は驚いた。

「今回は『ガネーシヤ式』やから」

ガネーシヤ式？　なんだそれ。

「ぶっちゃけた話、自分、しょぼいやん？」

しょ、しょぼい？

「自分みたいに、いっつもぐだぐだしてて自分で決めたことも実行でけへんしょうもないヤツでも、できる感じにケアしたるから、その辺はワシにまかせとき」

はあ……？

僕はガネーシヤの言ってる言葉の意味がよく分からなくて、ぽかんとした顔をした。  
た。

「自分、ワシのこと疑<sup>うた</sup>うてるやろ？」

「いやあ、まあ、そういうわけでは……」

「ほんならワシについてくるか？」

「それはちよつと……」

「どないやねん！ 何が問題やねん！」

何が問題かと言われれば、もうそれはガネーシャの外見だけをとっても、不安要素だらけであり、「変わる」「変わらない」なんて問題はおいといて解決しなければいけないこと（なんでお前は宙に浮いているんだ？ とか）が山積みなはずだけども、まるで僕の口は誰かに操られているかのように、こんなことを話していた。

「やっぱり、『変わる』のって難しいと思うんですよ。人間って変わらない生き物じゃないですか」

するとガネーシャは大きなため息を一つついて言った。

「自分、全然分かってへんわ」

「何がですか？」

「自分みたいな初心者の中の初心者にはどっから説明したたらええかなあ」  
ガネーシャは手であごをさすりながら言った。

「……せやな、たとえば、ニュートンくんておるやろ？」

「ニュートンくん？」

「そ、ニュートンくん」

「いや、分からないです」

「え!? 自分知らんの!? アイザック・ニュートンやで」

「アイザック……。ニュートン! そんなの知ってますよ。めっちゃくちゃ有名なじゃないですか。万有引力を発見した人ですよね」

「そや。そのニュートンや。彼も基本的にワシが育てたんやで」

「……冗談はやめてください」

「誰も冗談なんか言うてへんわ。だいたい、重力のこと教えたったのもワシやがな。あの子全然気いつけへんから、リング落としたったんや。その落としたリングにも気いつかなんだから、結局、三回リング落としたったもん。勘の悪い子やったで」

「……」

「なんで絶句やねん。ワシ神様やし。それくらいやるし。だいたいやなあ、歴史上のキーパーソン育てたんは、ほとんどワシやで。モーツァルトもピカソも孔子もナポレオンもニーチェもエジソンも……。最近で言うたら、ビル・ゲイツくんなんかも、基本的にはワシやな」

「……」

「そやから絶句すな言うてんねん。そんな歴代の偉人育ててきたワシのコーチ受けられるんやから、自分みたいな小粒な人間変えんのなんか簡単やがな。だいたい、

自分の目指しとるレベルなんてたかがしれとるやろ。天下統一とか目指しとるわけやあれへんのやろ？ 年収が倍になるとか、パーティー行ったら、ちやほやされるとか、そんなんやろ？ 余裕やで」

「……マジすか」

「マジもなにも大マジや。ラッキーやな、自分」

もう、何がなんだか分からなくなってきた。っていうか、こんなやつと普通に話してる時点で、根本的に何がなんだか分からないのだ。だったらいっそのこと、このおかしな生き物のおかしな話に乗ってやるのも悪くない、そんな大胆な考えがふと頭の片隅をよぎった。

「で？ どないすんの？」

首をくねくねとさせながら大きな顔を近づけてくるガネーシヤに、少し真剣な眼まな差しを向けると言った。

「変わるなら、変わりたいです」

その言葉を聞いた瞬間、待つてましたと言わんばかりに、ガネーシヤは鼻を天に向けパオーン！ と大きな声で吠ほえた。すると、どこから現れたのだろうか、一枚の紙がひらひらと揺れながら舞い降りてきた。

「サインして」

ガネーシヤは、空から舞い降りてきた紙を器用に鼻の上のにのせると僕に差し出した。

「な、なんですか、これは」

「契約書やがな」

「契約書……」

「だから、さつきから何度も確認しとるやろ。『覚悟はできとるんか』ちゅうて」  
紙の上には、見たこともないような文字がずらずらと書かれている。

「あの……ち、ちなみにここにはなんて書いてあるんですか」

「あ、これ？」

ガネーシヤは契約書を手にとると、僕に見せながら言った。

「これはやな、今からワシの言うことをたつた一度でも聞かんかったら、もう一生、何かを夢みることもなく、今までどおりのしょうもない人生をだらだら過ごして後悔したまま死んでいきます、いう誓約や。だってそうやろ？ ワシが教えるんは、自

分が変わるために一番簡単な方法やもん。それでも無理やったら、そら一生無理やろ。せやから、ワシの言うこと聞かんかった場合は、自分の将来に対する『希望』をな、代わりにごっそりいただくわ」

寝起きの眼で見えていたからだろうか、今までぼやけていたガネーシャの輪郭が、表情の隅々まで急にはつきり見えた気がした。

「ワシ、『希望』集めてんねん。全然モノにならんやつから『希望』集めて、筋のええ子に全部あげてんねん。そないしてえこひいきしとんねん。だからスゴイヤツつてめっちゃスゴなるし、ダメなやつは徹底的にダメになんねん」

「な、なんでそんなことしてるんですか？」

「ワシの趣味やねん」

そう言ったあとガネーシャは、だってスゴい子がどんだけスゴなるか見てみたいやんかあ、と言いなながら冷蔵庫まで歩いて行き、僕に何の断りもなく扉を開いた。

朝からいろいろなことが起きすぎていて、頭が混乱している。つていうか、やっぱり僕はまだ目を覚ましていなくて、目の前で起きている出来事はすべて夢なのではないか？ というより、そっちの可能性の方が圧倒的に高いのだが。

ただ。

ガネーシャと話している時からずっと心にひっかかっていたことがあった。それは、今まで、恥ずかしい思いをしたり、嫌な思いをしたりするたびに、今の自分を変えたいと思ってきたけど、結局一晩寝たら、なんとなくどうでもよくなって、何か新しいことをはじめるのが面倒くさくて、まあいつかって、いつもそうやって忘れて今日まで生きてきたんだけど、でも、心のどこかでは、いつか変わらなければ、何かを変えなければ、とりかえしのつかないことになるんじゃないか、そんな予感がずっとしていた。会社の同僚と酒を飲んでいても、友人と遊んでいても、なかまだ大事な仕事を残してきているような、やらなければならぬ仕事があるような感覚があるから、心から楽しめなくて、でも、どうしていいか分からなくて、その感覚に蓋ふたをして何年も生きてきた。

「きっかけさえあれば」いつも、そう思っている。まだそのきっかけが僕には来ていないだけなんだ、そう自分に言い聞かせてきた。……でも、本当は「きっかけ」なんてたくさん転がっていて、恥ずかしい思いをしたり嫌な思いをしたりした時がそれだったのかもしれないけど、そのきっかけを、僕は今までずっと素通りしてきたんだ。だからこのままでは「きっかけ」なんて来ない。それが「きっかけ」であることを決めるのは、今この瞬間の僕なんだ。

目の前のガネーシヤは、僕の、そんな思いが見せている幻なのかもしれない。なかった。

「あ、あとワシのこと誰にも言わんといてな」

そう言つてガネーシヤは鼻を鳴らした。

「ほら、ワシ有名やから、見つかるといういろいろ面倒やねん。『握手してください』的なこと言われるし」

ガネーシヤはそう言いながら、僕が朝食用に買つておいたヨーグルトを何の断りもなく取り出すと、封を開けて言った。

「スプーンある？」

こんなのについていって大丈夫か？

僕は猛烈に不安になりながらも、台所の引き出しをあけスプーンを取り出した。

スプーンを受け取ったガネーシヤは言った。

「おおきに」



得体の知れないやつ、得体の知れないやり方で何かを変えようとすると、自分で言うのもなんだけど、正気だとは思えなかった。しかも、神様を名乗るこの生き物は、まだ僕の味方なのか、敵なのかも分からない。だいいち、こいつうさん臭すぎる。

どれだけ考えても結論を出せなかった僕は、ええい！ と立ち上がった。

こんなの、シラフでやってられるか！

僕はズカズカと大股で冷蔵庫まで歩き、チューハイを取り出してぐびっと一口に飲んだ。

「お、朝から景気ええなあ！」

ガネーシャはけたけたと笑っている。

うえっぷ。

二日酔いに迎え酒をして、また吐き気が襲ってきた。もどしそうになって口を手でおさえながら、僕は、机の上に転がっていたボールペンをつかんだ。

## 本書の使い方

今日からあなたには、ガネーシヤから出題される課題を、毎日一つずつ実行してもらうことになります。ガネーシヤの課題は必ず「一日」で実行できるものになっています。

これらの課題は、ガネーシヤの言うとおり、それほど難しいものではありません。しかし、あなたの人生を大きく変えるほどの効果を持つものです。あなたの夢や目標（お金持ちになりたい、有名になりたい、自分にかできない大きな仕事をしたい、自分の持つ才能を充分に発揮したい、成功したい……）を実現するための能力を身につけることができるでしょう。

これらの課題の中には一見、「そんなことをして何の意味があるのだろうか？」と疑問に思うようなものがあるかもしれませんが、単なる迷信か、非

科学的な内容だと感じられるものもあるかもしれません。

しかし必ず実行してください。

これらの課題はガネーシヤの言うとおり、過去に大きな仕事を成しとげた偉人たちが通過した課題でもあります。実行し、その効果を実感してください。

もし、あなたが実行しない場合は、ガネーシヤとの契約が履行されてしまうことになるかもしれません。

さあそれでは一度、大きく深呼吸をして。

ガネーシヤの課題にとりかかりましょう。

## 1

「ホンマにええんやな？」

ガネーシャは僕の顔をのぞきこむようにして言った。

「よろしくお願いします」

不安がないわけではなかった。いや、むしろ不安だらけと言っていいだろう。ゾウの頭、ぼつてりとたるんだ腹、勝手に人の家のものを使う、場合によっては食う、そんな神々しさこうじょうのかけらもないような神様（自称）に、僕を変えるだけの力があるのだろうか？

でも、とにかくやってみるしかない。やってみてダメだったらその時また考えればいいじゃないか。

「ええ心がけや」

ガネーシャがゆつくりとうなずいた。

「さて。そんならぼちぼちはじめるけど……その前に一つ、ええかな？」

「はい。僕は唾つばをぐくりと飲み込むと言った。

「はい。なんででしょう」

「ガネーシヤは言った。

「神様に教おしえを請こうには、何か足らへんよね？」

——いきなり要求ですか。

まあ一筋縄でいかないとは思っていたが、のっけからきた。

こんな時、何を差し出せばいいのだろうか？

お金か？

でもお金なんて全然持ってないし、正直、もったいない。絶対にあげたくない。

しばらくの間考えた僕は、部屋の隅に無造作に投げ捨てられている段ボールの中から（いくらなんでも、これじゃあなあ……）と不安に思いながらも、ある物をガネーシヤに差し出した。

「なんや、これは？」

「これは、その、『あんみつ』です」

「あんみつ？ あんみつでなんや？」

ガネーシヤは、あんみつの容器を受け取るといぶかしそうな表情でたずねた。

(神様のくせにあんみつも知らないのか?)

そう思いつつ、一応僕はあんみつについて説明した。

「あんみつというのは、日本のお菓子です。親戚が和菓子屋なので、たまに送られてくるんです。まだいくつか残っているので……もしよかったら」

そう言いながら、僕はガネーシャが怒り出すんじゃないかとハラハラしながら見ていた。しばらくの間、ガネーシャはあんみつと僕の顔を交互に見合わせていたが、僕の手からスプーンを奪うと、恐る恐るあんみつを口の中に運んだ。

「……うま」

ガネーシャの手の動きは次第に早くなり、スプーンはあんみつとガネーシャの口の間を何度も素早く往復した。

「なんやこれ、めっちゃうまいやん。めっちゃうまいやん！」

ものの数秒間であんみつの容器は空になった。その容器を手にしたまま、ガネーシャは無言でじつと僕を見つめた。その眼光は異常に鋭く、強烈に何かを訴えかけていた。

僕はすぐにもう一つあんみつを持ってきてきてガネーシャの目の前に置いた。ガネーシャはもの欲しそうな目であんみつをながめたあと、チラッと僕を見て言った。

「ええのん？」

「どうぞ」

ガネーシヤは、わあつとあんみつに両手を伸ばしすぐさま蓋を開けスプーンを突っ込んだ。先ほどよりさらに勢いを増してあんみつを食べている。「うまあ、うまあ」と目を細めてあんみつを口にかきこんでいく。

またたく間に、容器は空になった。

僕はその様子をじっと見守っていたが、あんみつを食べ終わったガネーシヤは、ふうと一つため息をつき、こう言った。

「自分、いきなりホームランやで」

なんのことか分からない。首をかしげる僕に向かってガネーシヤは微笑んだ。

「いやあ、今までいろんな子教えてきたけど、まあつけからここまで心ゆさぶられたんは正直、はじめてや」

「と、いうことは……教えていただけれるんですか？」

「当たり前やがな。ごっついの教えたるがな」

「ありがとうございます！」

ガネーシヤは一体何を教えてくれるのだろうか。不安よりも期待が僕の胸を躍ら

せた。

しかし、実際のところ、ガネーシヤはすぐには教えてくれず、「ワシに直接指導してもらえるなんて、あり得へんことよ」「ワシの教えを請うために並んでる人、何年待ちや思う?」「ワシ、なんなら自分になりたいもん」などと、いかに僕の置かれてる立場が恵まれたものであるかを説き、「さて」と立ち上がったのでやつと教えてもらえるのかと思いきや「楊枝、ある?」と爪楊枝をリクエストされたりで、結局十分ほどガネーシヤのたわごとにつき合わされるハメになった。

「ついてこいや」

ガネーシヤは爪楊枝をくわえたまま歩き出した。

ついにガネーシヤの教えがはじまる。僕はドキドキしながらガネーシヤの後を追った。

ガネーシヤは玄関で立ち止まると、床を見下ろして言った。

「靴、みがけや」

「は?」

「せやから、靴、みがけ言うとんねん」

そしてガネーシヤは玄関先に無造作に脱ぎ捨ててある靴を指差した。



靴を……みがく？

何を言い出すんだ？

しかし、ガネーシヤは平然と話し続けた。

「よう見てみいや、自分の靴。めっちゃめっちゃ汚れてるやんけ」

僕は下駄箱と靴置き場に視線を落とす。

黒色の革靴がばらばらに置いてある、いや置いてあるというより捨ててあると表現した方がふさわしいかもしれない。これはふだん、僕が会社用に使っている革靴だ。こうして改めて見てみると、土や砂がところどころについて汚れているし、甲の部分はデコボコに曲がっている。靴の管理としてはかなり悪い部類に入るかもしれない。

「ほな、ワシ寝るわ」

そう言うのとガネーシヤは居間に向かって歩き出した。ゆっくりと居間を見回したあと、「ここやと体伸ばせへんしなあ」とわけの分からないうことをぶつぶつ言っている。しばらく観察したところ、ガネーシヤは自分の寢床を探しているということが判明した。こいつ、僕の家に住座るつもりなのか？ いやそれより大事な問題がある。僕はあわててガネーシヤに声をかけた。

「あ、あの」

「なんや」

「あの、もしかして、今のが『教え』……ですか？」

「そやで」

僕は口をぽかんと開けガネーシヤをながめた。すぐには言葉が出てこなかった。

「ほな」と言つて押し入れに入ろうとするガネーシヤを呼び止め、やつのことであつてきた言葉がこれだった。

「あ、あの、靴みがきなんて、何か意味あるんですか？」

ガネーシヤは大きなため息を一つつき「自分、全然分かつてへんな」と言つて、面倒そうな顔で話し出した。

「自分、イチローくん知つとる？」

イチロー？

ガネーシヤの口から意外な単語が飛び出したので、すぐには何を指す言葉か分からなかった。僕はゆっくりと確認するように話した。

「イチローって……もしかして元メジャーリーガーの鈴木一朗選手のことですか？」

「そや。そのイチローくんや。ええか？ イチローくんはな、他の選手が先に帰つ

でも、ずっと残ってクラブみがいとったんや。彼はな、小学生のころからそうしとんのや。『神聖な商売道具を粗末に扱うことは考えられない』言うてな。そういう仕事に対するまっすぐな姿勢があるから、メジャーですつとトップ取れてたんやで」

「へえ、そうなんですか……。それは、知らなかったです」

「ところで聞くけど、自分の商売道具ってなんや？」

「靴や！　ちゅうか、話の流れからしたらここは確実に靴やがな。アホかお前は。

ええか？　自分が会社行く時も、営業で外回りする時も、カラオケ行ってバカ騒ぎしてる時も、靴はずつと気張って支えてくれとんのや。そういう自分支えてくれるもん大事にできんやつが成功するか、アホ！」

アホ、と言われてカチンときた。確かに靴の扱いはぞんざいだったかもしれないし、それは少し反省すべき点かもしれない。ガネーシャの言うこともまちがっているとは思わないけど、でもそれが僕の人生の成功に直結しているとは、到底考えられない。

「あの……」

「なんや？」

「正直に言わせていただくと、やっぱり、靴をみがいたからといって成功するとは思えないんです。お金持ちにだって、だらしない人はいるでしょうし、もっと、他の課題はないですかね？」

するとガネーシヤはにらむような目つきで僕を見た。

「自分な」

「はい。なんでしよう？」

「今まで、自分なりに考えて生きてきて、それで結果出せへんから、こういう状況になってるんとちゃうの？」

「そ、それは……」

「ほなら逆に聞きたいんやけど、自分のやり方であかんのやったら、人の言うこと素直に聞いて実行する以外に、何か方法あんの？」

うぐぐ……。

「それでもやれへんていうのは、何なん？ プライド？ 自分の考えが正しいに違いない、いうプライドなん？」

プライド……なのだろうか。

「もしくは、期待してんのやろ。自分のやり方続けてても、いつかは成功するんや

ないかって」

ガネーシヤはタバコを取り出して火をつけた。

「ま、先に現実から言うのとくと」

ガネーシヤは僕の顔の近くに煙をふわーと吐きかけた。

「保証したるわ。自分、このままやと2000パーセント成功でけへんで」

僕は煙を手で払いながら声を荒げて言った。

「な、なんでそんなこと言い切れるんですか？」

「そんなもん、自分が『成功せえへんための一番重要な要素』満たしとるからやろがい」

「何ですか？ 成功しないための一番重要な要素って何なんですか？」

「成功しないための一番重要な要素はな、『人の言うことを聞かない』や。そんなもん、当たり前やろ。成功するような自分に変わりたいと思とって、でも今までずっと変われへんかったつちゆうことは、それはつまり、『自分の考え方にしがみついとる』ちゆうことやんか」

そしてガネーシヤは僕を見て言った。

「自分が成功でけへんのはなあ……今さつき『靴そんなことみがきして意味あるの？』と考える

た、まさにその考え方にすべての原因があるんやで」

ガネーシヤは人差し指でポンポンと僕のこめかみを小突いた。

「そんな一番、一番、一番、簡単なことも分かれへんのやろ、この頭は」

僕は大声で何かを叫びたい気持ちだったけど、何と叫んでいいか分からなかった。くそっ、くそっ！

結局、僕は靴をみがく以外の選択肢を見つけることができなかった。

その代わり、何の効果もなかったら、その時はもうビシッとズバツとはつきり言うてやる！

「お前のやりかたはまちがってる」って！

ガネーシヤは、玄関に座って靴をみがく僕を見下ろしながら言った。

「おい！ そんなりきんでみがくなや。もっと優しやさしゅうみがかんかい。『いつも頑張ってくれてありがとう』とありがと〜』で感謝しながらみがくんや」

「は、はあ」

「『はあ』てなんやあ！」

ガネーシヤは暑苦しい顔を僕にぐっと近づけてきた。

くそっ！

こいつ、これで何も変われなかったらただじゃおかないぞ！

「ガネーシヤの課題」

靴をみがく